

わが国における心理臨床家研究の概観

岩井 志保¹⁾

1. はじめに

1990年代、わが国においては阪神・淡路大震災や神戸児童殺傷事件など、災害や凶悪な事件が相次ぎ、人々の心に重篤な傷つきを与えたり、日常生活に大きな不安をもたらした。そのころより、人々の心をケアする専門家として心理臨床家の働きが世間から大きく注目されるようになった。

現在では、カウンセラー、セラピスト、臨床心理士といった言葉は世の中に広く浸透したと言える。また、多くの小・中学校には、スクールカウンセラーや心の教室相談員などが配置されており、福祉施設や職業安定所、企業、警察署などにおいても心理職の設置が進んできている。このような状況において、心理臨床家には、心理療法のみならず、犯罪被害、自然災害などによって心に深い傷をおった人々への心理的ケアや、施設入所児・者に対する日常生活での心理的関わり、発達障害や精神障害を抱えた人々やその家族への心理教育的支援など、より高度で多様な専門的活動が求められるようになってきている。

このように心理臨床家に対して社会からのニーズが高まる一方で、わが国では心理臨床における科学研究が軽視され、既成の理論や技法を事例に適用した事例報告が心理臨床研究の大半を占め、心理臨床家の質や心理療法の効果などに関する実証的研究が十分に行われていないことが指摘されてきた(下山, 2000; 2002)。しかしながら、クライアントに対し専門的で適切な援助が行われていくためには、心理療法の効果測定や心理治療に影響を及ぼす心理臨床家側の要因などを客観的な視点から検討していく必要があるだろう。ただ単純に数値化すれば、これまでに指摘されてきた臨床心理学の研究における問題点が解決すると言われると、そうでない部分が多分にあると言える。心理臨床家自身が、“クライアントから信頼を受けられる、この人ならばと選ばれる

自分であるかという、自分自身を見つめる姿勢を常に持ち続け(村瀬, 1996)”, たゆまぬ努力を続けていくことはもちろんのこと、それに加えて、心理臨床家に関する実証的な研究を積み重ね、教育や訓練に活かしていくことも、現時点では国家資格化されていない専門職である心理臨床家の社会的立場を確かなものにしていくために必要不可欠である。

そこで、本論文では、わが国において、これまでに行われてきた心理臨床家を対象にした研究を概観し、今後どのような観点から心理臨床家研究を行っていけば、わが国における臨床心理学の発展や心理臨床家の専門性の向上、発達・熟練に寄与しうるかを考察したい。

2. わが国における心理臨床家を対象にした研究

わが国の心理臨床家に関する研究は、1960年代に端を発し、心理臨床家とクライアントとの関係性や心理治療を受けたことによるクライアントの変化などが検討されてきた。このような、1960年代の心理臨床家研究は、欧米諸国で行われた研究の追討が多いことが指摘されている(田畑, 1978)。

1970年代から1990年代前半においては心理臨床家に関する実証研究はほとんど行われておらず、心理臨床家の特徴や発達・熟練過程、治療の成果などについては、事例研究の中で事例を担当した心理臨床家自身が独自に論じていることが多かったと言える。

1990年代後半から現在にかけて、わが国では、心理療法における科学的・実証的な研究が注目されはじめている。岩壁・小山(2002)は、事例研究の意義を認めながらも、心理臨床実践の効果性を検討するためには、科学研究を行っていく必要があると述べた。また、心理臨床家の教育訓練や発達・熟練過程にも焦点が当てられ、国内外の文献研究が行われた(新保, 2000; 金沢・岩壁, 2006aなど)。このように、わが国では心理臨床家を対象にした研究が徐々に増えてきていると言えよう。

以降では、わが国における心理臨床家に関する研究を内容別に大きく、①心理臨床家のあり方・心理治療に影

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

響を及ぼす心理臨床家側の要因, ②心理臨床家の教育・訓練, ③心理臨床家の発達・熟練, の3つに分類し, レビューを行いたい。

2-1. 心理臨床家のあり方・心理治療に影響を及ぼす心理臨床家側の要因

心理臨床家のあり方—例えば, 態度, 姿勢, 話し方, 動作—は, クライアントとの関係性や心理療法の効果と密接に結びついた重要な問題であると言える。わが国では, 長年にわたり臨床実践を行ってきた心理臨床家たちが, その経験をもとに心理臨床家はどうかあるべきかについてさまざまな視点から論じた書物は, 多数出版されている。一方で, その分野に関する研究については, 1960年代から行われてきているものの(船岡・高橋・浪花・大谷・鏞, 1963; 鏞・村山, 1963; 田畑, 1967など), その数は多くなかった。しかし, 1990年代~2000年代には, 心理療法の治療効果などに焦点が当たる中で, 心理臨床家のあり方や心理臨床家側の要因についての研究が増えてきていると言える。

船岡・高橋・浪花・大谷・鏞(1963)は, クライアントの人格転換に影響を及ぼす要因としてカウンセラーの発言に注目し, 6名のカウンセラーを対象に, ロール・プレイングにおけるクライアントの発言に対する応答の仕方を分析した。鏞・村山(1963)は, Rogersの人格変化の条件に関する仮説を検討するため, B. LennardのRelationship-Inventoryを用いて, 治療関係の条件を分析した。その結果, 治療関係の認知について, non-expertよりも expertのほうにより深い治療関係が示された。また, 失敗事例よりも成功事例のほうにより深い治療関係が示された。また, 治療関係の評価には, 治療効果(成功・失敗)がかなり影響することも明らかにされた。全体の評定では患者のほうが治療者よりもポジティブに治療関係を評定することが示された。

田畑(1967)は, クライアントの人格適応変化にはセラピストのあり方が密接に関連しているという仮定し, セラピストとクライアントの心理治療関係において有効に働くと考えられるセラピストの治療的要因について検討した。田畑は, 8要因(Basic emotional security, Willingness to meet and to help, Strictness to help, Feeling into “Lethality” Deep respect, Genuineness or congruence, Level of satisfaction and warm-feelings, Reconstruction and reservation of the client images) 15項目からなる質問紙を作成し, その因子分析結果より, 「安定さと充実感」, 「積極的な意欲」, 「深い尊重」の3因子が, 心理治療関係において有効に働くことを導き出した。

増田・外島・藤野・小川(2000)は, カウンセラーや, 教育, 福祉, 保健, 医療の領域に携わる対人援助職を志望する者, 援助職の資格を取得する予定の者のパーソナリティについて検討しており, 自己開示, 共感性, イラショナル・ビリーフなどにおいて対人援助職志望者と非志望者の間に有意な差を見出した。葛西(2006)は, 治療同盟尺度および面接評価尺度を邦訳・使用し, 4回のカウンセリング過程においてカウンセラーとクライアント(ボランティアの学生)の治療同盟や面接評価がどのように変化するかを検討した。その結果, 治療同盟については, 面接の回数をおうごとにカウンセラーもクライアントも評価が高くなっていくこと, また, クライアントに対するカウンセラーの応答の仕方が, 治療同盟の形成に影響していることが示唆された。

上記のように, これまでにいくつか研究は行われてきてはいるが, 心理臨床家のあり方や心理治療に影響を及ぼす心理臨床家側の要因が十分に検討されてきたとは言いがたい。近年, 海外の心理療法研究者の間では, 特定の技法による効果よりもさまざまなアプローチや技法間の共通要素—作業同盟と呼ばれる状態, クライアントとセラピストの信頼関係—の効果が重要であること, また, セラピストが面接中のクライアントとの間に起こる対人関係の微妙なニュアンスに気づき, それに基づいて行動できることが重要であることなどが指摘されている(金沢, 2002)。これらの研究結果は, わが国の熟練した心理臨床家の間でも, 常識的なこととして共有されているかもしれないが, それらを実証的に明らかにしたことが重要であると言えよう。今後は, わが国においても上記のような研究を行い, 海外の結果と比較検討していくことによって, わが国の心理臨床家の特徴を明らかにしていくことができるだろう。また, このような研究は, 心理臨床家を育てていくための教育・訓練にとっても大変有益であると思われる。

2-2. 心理臨床家の教育・訓練

心理臨床家としてのあり方やアイデンティティには, 自身の経験してきた過去の出来事や志望動機なども影響していると考えられるが, 大学院での心理臨床に関する専門的な訓練・教育に大きな影響をおよぼしていることは想像に難くないだろう。心理臨床実習やスーパービジョン, ケースカンファレンスなどの訓練・教育過程では, 心理臨床の専門知識や技術を獲得するだけでなく, 心理臨床家のパーソナリティに変化が生じることもあると推察される。

訓練・教育については, 昔から絶えず議論されてきており, 特に臨床心理士を養成するために専門教育を行う

指定大学院が設立された以降では、どのような養成課程やシステムが必要か、また、効果的かについて積極的な議論が続けられている（松田・浜渦・田畑・藤本・正木・早矢仕・磯田・田辺・橋本・渡部・南山・星野，2006；藤原，2002；2003；畠瀬・小林・白石，1999など）。その一方で、心理臨床家の訓練・教育の効果についての調査報告、実証的な研究は多くない。

中田（1980）は、カウンセラー訓練としてカウンセリング・セミナーを行い、そこでのグループ・プロセスの展開について考察した。セミナーの参加者の多くは、セミナー後、人格転換という表現で内的変化を訴えた。また、セミナーのpre-postで2回行われたY-G性格検査におけるpostの結果では、典型的なDirectorタイプのプロフィールが示された。本城・河野（1995）は、心理臨床家を対象に基礎訓練の受け方や初期事例の内容などを調査した。その調査に参加した多くの心理臨床家は、初期事例の経験から、「事例に取り組む姿勢に影響が与えられた」など、何らかの事柄を学んだと感じ、「そこから学んだことはそれ以降の臨床実践の中で実際に役立つ重要な事柄であった」と記述しており、初期事例が心理臨床家のその後の臨床活動にとって重要であることが示された。葛西（2000）は、アメリカで行われているカウンセラー養成訓練方法のプラクティカムをわが国の大学院生に実施し、その効果を検討した。その結果、カウンセリング技術の向上と柔軟性の増加が見られた。さらに、葛西（2005）は、養成課程の大学院生の成長・発達を客観的に測定し、効果的な訓練方法を見出すために、カウンセリング自己効力感尺度を邦訳し、その信頼性・妥当性の検討を行った。

森田・加藤・堀・西原・細野・坪井（2002）では、心理臨床を学ぶ大学院生に初回面接の意義や役割、留意点をまとめさせ、それに基づき、大学院生の視点からの「初回面接の覚え書き」を報告した。報告の内容としては、初心者立場から面接にどう臨むかというセラピストの心構えについての言及が多かったことが特徴的であるとされた。また、森田・三後・上杉・大林・川口・永井・服部（2006）では、心理臨床を学び始めた初期段階での親面接の難しさに触れ、心理臨床訓練の一環として大学院の森田の授業において、心理臨床を学ぶ大学院生と文献検討・事例検討を行い、「親面接で生じやすい問題と留意点」をまとめた。その結果、大学院生の視点から、親面接を実践するにあたって重要とされる7つのテーマ（「多様な面接形態」、「親面接における子どもの見立て」、「家族全体を見る視点」、「親面接の焦点」、「親にとっての面接場面」、「セラピスト側の問題」、「親面接に臨む姿勢」）が見出された。入谷（2004）は、臨床心理士養成コー

スに所属している大学院生の指導に焦点をあて、解決志向アプローチに基づいた、面接の構造化とそれぞれの局面での介入法を習得するためのカウンセラー・トレーニング・プログラムを提案した。

吉良（2002）は、セラピストの教育だけでなく、彼らの心理的援助という側面も重視し、「セラピストフォーカシング法（TFM）」の開発を試み、TFMの3つのステップ（「全体を確かめる」、「方向を定める」、「フェルトセンスの吟味」）によって、セラピストはクライアントとの関係において生じる自分自身の体験を吟味、理解することができることと論じた。

検査技法の教育方法に関する研究報告も見受けられる。森田・中原（2004）は、ロールシャッハ法の教育についてテスト体験の導入を提案した。心理臨床家を志望する大学生、指定大学院に所属する大学院生は、心理臨床家よりロールシャッハを施行された後、その体験についてレポートを書いた。森田らがそのレポートを分析した結果、テスト体験は、クライアント様感情の体験、自分自身についての理解に深まり、技法習得といった点で心理臨床家志望者や初心者にとって有意義な体験となることが示唆された。片本（2005）は、心理アセスメントの実習として、樹木画の対提示を用いて解釈仮説の立て方の実習を行うことを提案した。描画作品を対提示されことによって、1枚からでは立てづらかった解釈仮説が、もう1枚と比較することで「どちらかという」とこのような傾向があるというように仮説が立てやすくなる傾向が見出された。また、実際の事例を見たときには、対照的な描画を仮想し比較することで解釈仮説を立てるようになったという報告が得られた。

田畑らは、2004年から2006年にかけて大学院修士課程修了後における研修状況に関する大規模な実態調査を行った。修士修了後の研修参加については、経験年数が増すにつれ研修への参加経験が増加することが明らかになった。一方で、修士修了後のスーパービジョンについては、受けたいと思っけても、実際には人脈や時間や金銭面などの制約によって十分に受けることができていないことも多いという現状が明らかになった（田畑・石牧・近藤・佐部利・高木・辻・池田・江口・生越・酒井・杉下・鈴木，2007；田畑・近藤・佐部利・高木・石牧・辻・池田・江口・生越・酒井・杉下・鈴木，2007a）。また、実態調査を受けて、修士修了後における研修プログラムが提案された。プログラムの内容としては、修了後1年目では、出身大学院の相談室や修了生とのネットワークを作り、情報を得やすい環境を作ること、2年目以降では、臨床心理士資格を取得できない者への情報面・情緒面からのサポートを行うこと、スーパービジョンにつ

いては、それぞれのニーズに合ったスーパーバイザーを選択できるようにすることなどがあげられた（田畑・近藤・佐部利・高木・石牧・辻・池田・江口・生越・酒井・杉下・鈴木，2007b）。さらに、勤務している領域での個別プログラムも提起した（田畑・池田・江口・生越・酒井・杉下・鈴木，2007）。

わが国における心理臨床家の教育・訓練の研究については、上記のような取り組みが行われてきた。これらの取り組みは、臨床心理士の養成課程における教育・訓練の充実と発展に寄与する重要な研究報告であると言える。調査、研究の方法はさまざまで、教育者となった心理臨床家が、自らの経験をふまえ試行錯誤しながら教育・訓練を行ってきたことがうかがわれる。そして、その研究のほとんどが、1回の実施報告に終わっており、訓練の効果などを継続的に検討している調査報告はないと言える。また、心理臨床家の初学者を対象とした研究が多くを占め、指定大学院を修了して数年の若手心理臨床家や中堅者の研修や教育について検討した研究報告は少ない。

今後は、田畑らのように、経験年数に応じた教育・訓練の提起を行うこと、また、その効果について長期にわたって検討していくことが必要であろう。

2-3. 心理臨床家の発達・熟練

教育・訓練の議論と並行して、心理臨床家の発達・熟練についてもさまざまな視点から議論がなされてきた。しかし、実証的な研究はほとんど行われてきていないのが現状である。

渡部（1963）は、共感的理解を通して治療者のあり方を検討し、治療経験（なし～10年）によって共感的理解の仕方に違いがあることを明らかにした。治療経験を積むにしたがって、共感的理解の仕方は、‘知的のレベル’の共感から、‘感情のレベル’、‘動きのレベル’を経て、‘experiencingのレベル’へと移行するとされた。山松・森（1965）は、3人のカウンセラーの成長過程に関する自由討議と回想記を検討し、カウンセラーの成長には時には挫折し、時には自信にあふれるなどの起伏があり、充実感は個々で異なるが、進もうとする方向や感じているものには個人差を越えた共通性があると述べた。丹下・日野（1982）は、プレイセラピーを行っているセラピストを対象に、セラピストの自己イメージおよびセラピー過程の体験についての評価を行った。熟練者（経験年数3年以上）と初心者（経験年数3年未満）を比較した結果、自己イメージについては熟練者と初心者には差が見られなかった。セラピー過程の体験評価については、熟練者のほうがクライアントの心理的な動きがよく

わかっていることが示唆された。武島・杉若・西村・山本・上里（1993）は、精神療法における臨床経験年数と治療者の行動・態度の関連について検討しており、経験年数の長い心理臨床家の間では技法間の差が小さくなり、治療関係に類似性が見られることが示された。

金沢と岩壁（金沢・岩壁，2006b；岩壁・金沢，2006）は、Orlinsky（1999）らのDPCCQ（Development of Psychotherapist Common Core Questionnaire）を日本語に翻訳し、暫定的に日本語版「心理臨床家の成長に関する調査票」を作成し、心理臨床家の自己評価に影響を与える要因や困難に直面したときの対処方法について検討した。その結果、心理臨床家としての訓練開始時において心理臨床家としての自己に肯定的な評価をもつことがその後の心理臨床家としての肯定的な自己評価につながる可能性があることが示唆された。また、心理臨床家が直面する困難としては、職業的な自信の喪失、対処が難しいケースを持つこと、逆転移感情があげられた。そして、このような困難に直面した際、心理臨床家は一人に対処しようとする傾向が強いことが示された。

発達・熟練の研究では、大学生・大学院生など、心理臨床家初心者を対象とした研究が多く見られる（内海・小田，1997；松原，2004；河内・斉藤，2004など）。

内海・小田（1997）は、心理臨床家初心者の初期事例における初回面接に注目しており、初心者の初回面接では、初心者特有の「意気込み」や「緊張」とあいまって、柔軟性に欠ける、固い面接になりやすいと述べた。また、内海（1997）は、内海・小田の知見をふまえ、自身の初期事例の初回面接をとりあげ、クライアントと関わる中で気づいた初心者の課題について論じた。新保（2001）は、臨床心理学を専攻する大学院生を対象に、臨床事例のビデオ教材を用いて臨床判断能力の検討を行った。その結果、心理臨床家の初心者である大学院生は、臨床事例の部分的な情報にとらわれてしまうこと、多くの仮説を立てられないこと、自身の経験や文献などで得た知識を十分に活用できていないことなどが示唆された。松原（2004）は、約1週間、精神病院や養護学校で実習を行った臨床心理学の学生の成長を検討した。その結果、学生は、知識的（例：教科書だけでは理解できなかった現実の精神・心理症状の多岐性を身をもって学んだ）、社会的（例：偏った予備知識が、思い込みや偏見につながった、社会や自己の中にあった患者や臨床現場、施設への差別感に対峙し反省した）、臨床感性的（例：心の治療や教育には時間がかかること、焦らず見守ることの大切さなどを学んだ、対象に初めて真剣に向き合った達成感を得た）、心理的（例：ものの見方、価値観の振り返り、自分が臨床現場で働きたいという希望は本物が自

問自答)という4側面において成長していることが見出された。河内・斉藤(2004)は、大学生、大学院生、心理臨床家の3群を対象にして実験を行い、それぞれの被験者群が呈示されたクライアントの情報からどのようにクライアントを理解するのかを検討した。その結果、より豊富な専門的知識を有しているほうが、つまり、大学生・大学院生よりも心理臨床家のほうが、クライアントが語った情報からより多くの仮説を立て、クライアントを適切に理解していることが示唆された。

わが国の心理臨床家の発達・熟練に関する研究では、経験年数によって初心者、中堅者、熟練者などの群分けを行っているものが多い。しかし、どれくらいの経験年数を積んだ者が熟練者なのか、どのような知識や技術を獲得した者が熟練者なのかなど、何をもちて“熟練者”と定義するのが明確にされておらず、研究者の判断に基づいて群わけされているのが現状である。

わが国においては、熟練した心理臨床家の特徴、および、心理臨床家の発達・熟練の段階を明らかにすることが必要であると言える。

アメリカでは、Skovholt & Rønnestad (1995) のカウンセラー・セラピストの発達の8段階モデルや Stoltenberg & Delworth (1987) の統合的発達モデルが提唱されており、わが国へは金沢(1998)によって紹介されている。また、Jennings & Skovholt (1999) は、仲間指名法 (peer nomination methodology) により選出された“the best of the best”である10人の熟練セラピストに対してインタビュー調査を行った結果より、熟達者と言われるセラピストの特徴として、認知、感情、関係性の3領域9カテゴリ(1. 熟練セラピストは貪欲な学習者である(認知)、2. 蓄積された経験は熟練セラピストにとって重要な資源となる(認知)、3. 熟練セラピストとは認知的複雑性と人間の情況のあいまいさを大切にする(認知)、4. 熟練セラピストは自己への気づき、内省、非防衛的態度、および、フィードバックへの開放性と定義される感情的理解力をもっている(感情)、5. 熟練セラピストは精神的に健康であり、自身の情緒的な健康に注意をはらえる成熟した人である(感情)、6. 熟練セラピストは精神的な健康が自らの仕事の質にどのような影響を与えるかを自覚している(感情)、7. 熟練セラピストは強い関係性スキルを持っている(関係性)、8. 熟練セラピストは強固な治療同盟を築くために役立つ人間の特性についてのたくさんの信念を持っている(関係性)、9. 熟練セラピストはセラピーにおけるひととき優れた関係性スキルを使うエキスパートである)を記述した。

海外の研究にも問題点はあるが、これらの研究を参考に、わが国の教育・訓練制度や臨床実践にそった、わが

国独自の心理臨床家の発達・熟練モデルを提唱していくことは可能であろう。また、臨床実践を行っている領域固有の知識の蓄積や熟練を視野に入れた発達・熟練研究を行っていく必要もあるかもしれない。

3. わが国における心理臨床家研究の今後の課題

本稿では、わが国における心理臨床家に関する研究を、①心理臨床家のあり方・心理治療に影響を及ぼす心理臨床家側の要因、②心理臨床家の教育・訓練、③心理臨床家の発達・熟練の3領域にわけて、レビューを行った。その結果、わが国では心理臨床家を対象にした実証的な研究が非常に少ないことが示された。また、3領域それぞれにおいて、これまでの研究の問題点および今後の課題が示された。

①心理臨床家のあり方・心理治療に影響を及ぼす心理臨床家側の要因に関する研究の問題点は、実証的な研究の数の少なさにあると言える。今後は、これまでに心理臨床家熟練者の間で共有され、語り継がれてきた心理臨床家のあるべき姿や態度、心理治療に影響を及ぼす心理臨床家側の要因などについて、海外の研究手法や結果を参照しながら、実証的な研究を行っていくことが必要であろう。②心理臨床家の教育・訓練に関する研究の問題点は、ほとんどが、1回の実施報告に終わっており、訓練の効果などを継続的に検討している調査報告はないことである。また、心理臨床家の初学者を対象とした研究が多くを占め、指定大学院を修了後数年の経験を積んだ若手心理臨床家や10年から15年の臨床経験を持つ中堅者の研修や教育について検討した研究報告が少ない。心理臨床家の臨床実践の質を向上させていくためにも、大学院教育を充実させ効果を検討していくだけでなく、大学院終了後の心理臨床家を追跡調査し、必要とされている研修や教育を明らかにし、研修・教育の実施および効果測定を行っていく必要があると言える。③心理臨床家の発達・熟練に関する研究の問題点は、何をもちて“熟練者”と定義するのが明確にされていないこと、また、発達・熟練していくプロセスをとらえた研究がないことである。わが国においては、熟練した心理臨床家の特徴、および、心理臨床家の発達・熟練の段階を明らかにすることが必要であると言える。発達・熟練の段階、熟練者の特徴が明らかになることによって、心理臨床家の教育もより現実に即した効果的なものになっていくと考えられる。

これまで述べてきたように、わが国における心理臨床家研究は、まだまだ不十分で発展途上であるが、多様で複雑になっていく社会のニーズに応じていける心理臨床家が多く育っていくためにも、研究者がもっと増え、研

究が発展していくことが望まれる。

引用文献

- 藤原勝紀 (2002). 臨床心理士養成に関する実践研究課題の焦点 京都大学大学院教育科学附属臨床教育実践研究センター紀要, **6**, 29-40.
- 藤原勝紀 (2003). 臨床心理士養成大学院の教育研究体制と臨床実践指導研究分野の新しい展開 京都大学大学院教育科学附属臨床教育実践研究センター紀要, **7**, 27-36.
- 船岡三郎・高橋史郎・浪花博・大谷不二雄・鏞幹八郎 (1963). 人格転換のための必要十分条件に関する実験的試行 京都市教育研究所報告, **101**, 1-48.
- 畠瀬稔・小林剛・白石大介 (1999). 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科におけるカウンセラー養成・研修システムの構築 臨床教育学研究, **5**, 65-85.
- 本城秀次・河野莊子 (1995). 心理臨床家の初期経験とキャリア発達—初期事例の体験の仕方を中心にして— 平成7年度教育研究特別経費プロジェクト研究分担課題報告書.
- 入谷好樹 (2004). 面接の構造化に関するカウンセラー・トレーニング・プログラムの提案 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要, **19**, 163-172.
- 岩壁茂・金沢吉展 (2006). 心理臨床家の職業的発達に関する調査から：(2) 心理臨床家の直面する困難とその対処法について 日本心理臨床学会第25回大会発表論文集, 235.
- 岩壁茂・小山充道 (2002). 心理臨床研究における科学性に関する一考察 心理臨床学研究, **20** (5), 443-452.
- Jennings, L. & Skovholt, T. M. (1999). The cognitive, emotional, and relational characteristics of master therapists. *Journal of Counseling Psychology*, **46**, 3-11.
- 金沢吉展 (1998). カウンセラー：専門家としての条件 誠信書房.
- 金沢吉展 (2002). 臨床心理学における心理療法教育の目標, 方法, および今後の課題 精神療法, **28**, **4**, 14-22.
- 金沢吉展・岩壁茂 (2006a). 心理臨床家の専門家としての発達, および, 職業的ストレスへの対処について：文献研究 明治学院大学心理学部附属研究所紀要, **4**, 57-73.
- 金沢吉展・岩壁茂 (2006b). 心理臨床家の職業的発達に関する調査から：(1) 臨床家としての自己評価に影響を与える要因について 日本心理臨床学会第25回大会発表論文集, 234.
- 葛西真記子 (2000). カウンセラーの反応と柔軟性の変化—プラクティカムを通してのカウンセラー養成訓練の試み— 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), **15**, 45-53.
- 葛西真記子 (2005). 「カウンセリング自己効力感尺度 (Counselor Activity Self-Efficacy Scales)」日本語版作成の試み 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), **20**, 61-69.
- 葛西真記子 (2006). セラピスト訓練における治療同盟, 面接評価, 応答意図に関する実証的研究 心理臨床学研究, **24** (1), 87-98.
- 片本恵利 (2005). 樹木画の対提示による心理アセスメントに関する実習の試み—臨床心理基礎実習におけるバウムテストの解釈に関する研究— 沖縄国際大学人間福祉研究, **3** (1), 37-53.
- 吉良安之 (2002). フォーカシングを用いたセラピスト自身の体験の吟味 心理臨床学研究, **20** (2), 97-107.
- 松田純・浜渦辰二・田畑治・藤本亮・正木祐史・早矢仕彩子・磯田雄二郎・田辺肇・橋本剛・渡部敦子・南山浩二・星野和実 (2006). 心理臨床家の教育における倫理的, 法学的課題—大学院教育および生涯教育に関する検討— 静岡大学人文学部人文科学研究報告, **56** (1), A1-A22.
- 増田真也・外島裕・藤野信行・小川正男 (2000). 対人援助職の適性に関する研究 (1) 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術), **49**, 251-228.
- 松原由枝 (2004). 臨床心理学実習が学生に及ぼした成長要因 川村学園女子大学研究紀要, **15** (1), 43-54.
- 森田美弥子・加藤容子・堀英太郎・西原ゆき・細野久容・坪井裕子 (2002). 初回面接の役割と留意点—臨床実践を学ぶ大学院生による「覚え書き」作成の試み— 「心理臨床」名古屋大学発達心理科学教育研究センター心理発達相談室紀要, **17**, 3-11.
- 森田美弥子・三後美紀・上杉春香・大林加奈・川口さよ・永井小百合・服部香子 (2006). 親面接で生じやすい問題と留意点—心理臨床を学ぶ大学院生の視点から— 「心理臨床」名古屋大学発達心理科学教育研究センター心理発達相談室紀要, **21**, 3-12.
- 森田美弥子・仲原睦美 (2004). ロールシャッハ法教育における「専門家によるテスト体験」導入の意義 ロールシャッハ法研究, **8**, 61-70.
- 村瀬嘉代子 (1996). 子どもの心に出会うとき—心理療法の背景と技法— 金剛出版.

- 中田洋子 (1980). カウンセラー訓練における一考察— 2—Group processの展開とその評価について 社会問題研究, 29(4), 89-107.
- Orlinsky, D. E., Rønnestad, M. H., Ambühl, H., Wil-lutzki, U., Botersmans, J., Cierpka, M., Davis, J. & Davis, M. (1999). Psychotherapists' assessments of their development at different career levels. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 36 (3), 203-215.
- 下山晴彦 (2000). 研究の方法論 心理臨床学研究の技法 福村出版.
- 下山晴彦 (2002). 日本の臨床心理学研究の特異性 臨床心理学, 2 (1), 15-19.
- 新保幸洋 (2000). カウンセラーの熟達化及び成長・発達モデルの構築に関する研究動向 大正大学臨床心理学専攻紀要, 3, 8-23.
- 新保幸洋 (2001). 臨床心理学を専攻する大学院生の臨床判断力に関する研究 大正大学臨床心理学専攻紀要, 4, 2-16.
- Skovholt T. M. & Rønnestad M. H. (1995). *The Evolving Professional Self; Stages and themes in therapist and counselor development*. Chichester: John Wiley & Sons.
- Stoltenberg, C. D. & Delworth, U. (1987). *Supervising Counselors and Therapists: A Developmental Approach* San Francisco. Jossey-Bass.
- 田畑治 (1967). セラピストの治療的要因の因子分析 臨床心理学研究, 6 (1), 31-36.
- 田畑治 (1978). 心理治療関係による人格適応過程の研究 風間書房.
- 田畑治・石牧良浩・近藤千加子・佐部利真吾・高木希代美・辻貴文・池田豊應・江口昇勇・生越達美・酒井亮爾・杉下守男・鈴木金彌 (2007). 修士修了直後, ならびに臨床心理士資格取得後の勤務状況, 研修, スーパービジョン等についての調査報告 文部科学省学術フロンティア推進事業研究成果報告書, 201-232.
- 田畑治・近藤千加子・佐部利真吾・高木希代美・石牧良浩・辻貴文・池田豊應・江口昇勇・生越達美・酒井亮爾・杉下守男・鈴木金彌 (2007a). 修士修了直後, ならびに臨床心理士資格取得後の勤務状況, 研修, スーパービジョン等についての追跡的研究2 文部科学省学術フロンティア推進事業研究成果報告書, 233-246.
- 田畑治・近藤千加子・佐部利真吾・高木希代美・石牧良浩・辻貴文・池田豊應・江口昇勇・生越達美・酒井亮爾・杉下守男・鈴木金彌 (2007b). 修士修了直後, ならびに臨床心理士資格取得後の勤務状況, 研修, スーパービジョン等についての追跡的研究3 文部科学省学術フロンティア推進事業研究成果報告書, 269-284.
- 田畑治・池田豊應・江口昇勇・生越達美・酒井亮爾・杉下守男・鈴木金彌 (2007). 大学院修了後5年間における臨床心理士研修プログラムの提起 文部科学省学術フロンティア推進事業研究成果報告書, 285-294.
- 武島あゆみ・杉若弘子・西村良二・山本麻子・上里一郎 (1993). 精神療法における臨床経験年数と治療者の行動・態度 カウンセリング研究, 26 (2), 97-107.
- 丹下庄一・日野弥恵 (1982). プレイ・セラピストのイメージについて—初心者と熟練者の比較— 大阪市立大学生活科学部紀要, 30, 229-237.
- 鑓幹八郎・村山正治 (1963). カウンセリングにおける治療者認知の差異—Relationship-Inventoryによる検討 教育心理学年報, 2, 86.
- 内海新祐・小田由美子 (1997). 初心者の初回面接 (1) ~初心者自身の振り返りにより感じられた初めての初回面接における固さ~ 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 20, 119-131.
- 内海新祐 (1997). 初回面接 (2) —ラポール・情報収集・見立てが不十分だった初心者の初回面接の検討事例— 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 20, 133-140.
- 渡部淳 (1963). 治療関係における共感過程についての実験的考察 臨床心理学研究, 2 (3), 128-142.
- 山松質文・森美智子 (1965). カウンセラーの体験について 臨床心理学研究, 4 (3), 1-9.

(2007年9月28日受稿)

ABSTRACT

An Overview of Therapists Research in Japan

Shiho IWAI

The purpose of this article was to overview researches of therapists in Japan. In this study, researches of therapists was surveyed from 3 points of view — (1) characteristics of therapists and therapists' factors of treatment effects, (2) education and training for therapists, (3) professional growth of therapists. As a result, it was showed that there were not a lot of researches of therapists in Japan. In (1) field, the researches mostly reexamined ones in other countries. In (2) field, master therapists or educators discussed education and training for therapists, but there were a few researches to show training effects. In (3) field, therapists' developing models in the USA were introduced, but the developing model of Japanese therapists was not proposed as yet. Finally, this study mentioned the tasks to overcome the existing problems and to development researches of clinical psychologists in Japan.

Key words: therapists, education and training, developing model.